
袋とじ戦争

まも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袋とじ戦争

【Nコード】

N0033M

【作者名】

まも

【あらすじ】

ある集落に流れついた謎の物体の話。

（前書き）

注意

- ・ 本文、結構長いです。
- ・ 作者はドが付く素人です。

人は、中身が見えない物に好奇心を刺激される。
中を見ているのは眼では無く、心が見ている。

開けて見るのは落胆か、それとも歓喜か。

私は目の前の袋とじにただ夢中になっていた。

「まゝたムズカシイ顔で悩んでるネ。クロちゃん、そんなんじゃ老けるヨ」

口元から二つに生やした立派な白いヒゲを撫でる老人、白髪で全て後ろに纏めて縛っており肩甲骨あたりまで垂らしている。

背丈は前かがみになっているのもあり、かなり低く見える。百五十センチ程度だろうか。

青地のカンフー服に身を包み、片手には一握りの肉まんを掴んでいた。

「テン師匠、顔を見ていないのに表情を言い当てるのはやめて下さい。」

「又ヒビ、言われなくなったら気配を感じて顔を変えることネ。

クロ、お前は修行が足りんヨ」

肉まんを頬張りよたよたと部屋の奥へと消えて行った。

「…ふう」

読んでいた雑誌を傍に置き、もたれていた直様にでも壊れそうな木製の椅子から立ち上がる。

長時間同じ格好で居ると全身に疲労感、不快感が訪れるために解消を行う為に背伸びをする。それがまた心地が良いのだ。

六畳程度の狭い部屋は、椅子と山積みになった雑誌達で一層狭く

見える。

唯一風が出入する外開きの窓を開け、両脇に付けられた白いカーテンが風に煽られなびく。

窓を開け外を見ると、視界の上部には夕焼けによって赤く染められた空が、視界の下部には数々の家が積み重なり接合部分是不恰好な生活排水用パイプが露出している。そんな景色が視界いっぱい広がる。

ここは、赤群街と呼ばれる集落。

東大陸の中部に位置するこの集落は、元々東大陸で北部と南部に思想の違いが原因で一つの部族が分断し紛争が絶え間なく続き、その飛び火を受けていた。

数十年前から続く紛争によって流れ着いた人々が非抗争思想を掲げ、中立の立場で活動を行っているのだ。

窓枠に手を乗せ風を感じている彼、クロもまた赤群街の住人である。

まだ幼さが残る顔立ちから見るに十八歳程度で背丈は先程の老人より頭二つ分高いと言ったところ。

真紅のカンフー服に身を包み、服の正面には左右対称に三つずつ龍の装飾が施された金色のボタンが太陽の日差しを浴び緋色に光る。服の隙間から僅かに覗く素肌は、数多の修行を積み重ね鍛えてきたであろう風貌を思わせ、風に煽られる肩まで伸びた黒い髪はまるで龍の飛翔のように静かに、それでいて情熱的に揺れ動いていた。

「おい！ 誰かちよつと来てくれないかー！ “獄門”に大物が流れついたんだー！」

視線を下げると、路地裏で灰色の作業服を着た男数人が人を集めていた。

獄門、それは赤群街の西に位置する南北を両断する激戦区である。戦場で使われ、持ち主を失った兵器や戦闘糧食などが流れ着く場所、赤群街の位置も重なり生活をするために必要な素材を確保する重要な場所でもあるのだ。

度々ある無残に転がる死体によって、その名が付けられた。

「ゲヒヒ、またムズカシイ顔で悩んでるネ、体調悪くするヨ」

「お師匠様、表情はどれだけ生活に重要なのですか。」

振り返ると何時の間にかまた背後に老師が立っている。手には酒瓶がしっかりと握られていた。

「さつさと手伝いに行つてあげるネ。ここで若い人間、数人程度しかいないんだからネ」

「は。お師匠様、アルコールは程々をお願いしますよ」

わかつとる。という風な表情で壁にもたれかけひらひらと手を振り見送る。

クロは老師へ向けて両の手のひらを付けた状態で胸の前に出し軽くお辞儀をした。

「では、行つて参ります」

クロはそう告げると思い切り足を曲げ、そのまま後ろへ宙返り。

この部屋は積み重ねられた家々の頂点に位置している。高度にすると約十五メートル。

空中で体をひねりながら突起物をタンタン、と蹴りながら降りて行き、足を曲げ衝撃を殺し地上に降りるその動きには全く無駄がなかった。

「おお、クロじゃねえか！ お前も手伝つてくれんのか！」

姿勢を戻し視線を上げると先程窓で見ていた作業服を着た男性達の一人であった。

袖をまくりあげ逞しい腕が見えている。笑顔で寄ってくるその姿は優しい顔立ちによつて心の片隅に安心感を芽生えさせるほどであった。

獄門にて物品を回収し、使えそうな代物を頒布している人達でこの集落の人間からはかなりの信頼を集めている男。

クロは度々、テン老師の元で修行を行い会得した体術を利用して運送の手伝いをしていた為に既に知り合いになっている。

「ええ、いつもお世話になってますし、それにラクダさんの手助

けになればと思ひまして」

「ああ、クロがいりや百人力だ！　いつもの五倍は早く作業が終わるぜ！」

ラクダと呼ばれている男は右腕を左肩から回し顔を寄せクロの頭をわしわしと撫でた。

ふと前を見るとラクダと同じ作業服を着ている男数人が走つて奥へと入つていくのが見える。

「おつとこんなことしてる場合じゃねえな、人数集まつたみてえだし行くか」

はい、と頷きラクダの後を追う。

夕方という事もあり街全体が赤く染まり、ベニヤの集まりのこの街が少し芸術的に思えた。

一般的に見ればハシゴが所々に掛けられ家が無造作に積み重なるこの街はともじやないがキレイと言えるものではない。

人が三人ほど通れる道幅の両端に掘られた溝には一軒一軒に繋がるパイプから生活排水が流れ、視界は両側にそびえ立つ家々が日光を遮る。

だが住人からすれば住めば都、塵も積もれば美しいんだろう。窓から飛び降りた場所から左側に三本程に分かれた道の中心を突っ切り、向かつて正面に左右に分かれる道が続く。

その道を右手に抜け数分ほど走ると視界が開け、砂丘に延々と続くフェンスが現れる。これが獄門だ。

「あそこ見えるか？　あの黒いのが落ちてるどころ」

おもむろにラクダはフェンスがギリギリ視認できる程度の場所を指さした。

目を凝らしてよく見ると確かに何か黒く、大きいものが落ちている。

「あれを持つてくるんですね」

そつだ、とラクダは頷き再び二人は走り出す。

赤群街内部のアスファルトの地面とは質が違い砂状なので足を取

られやすくとても歩きにくい。

「相変わらず足速えなクロはよお、ちょっとまってくれ、オジサン足取られちゃって」

「はは、ラクダさんもテン師匠に体術習ったらどうです？」

そうからかいながら歩いていくうちに先程指をさした黒い大きな丸い物体の近くへと辿り着いた。

そこには既に到着していた他の作業服の男達が興味津々でその物体が何かかを調べているところであった。

二人が近づいてきたのを察知し、一人がこちらを振り向き声をかける。

「お、ラクダさん遅いですよ」

「ああ、すまねえな、どうにも歳には勝てん」

ラクダはこの獄門から物品を調達するチームの取締役のようなポジションに立っていて、ラクダが使えそうだと鑑定したものだけを持っていくようにしている。

軽く挨拶を済まし、黒い謎の物体の他に獲得した食料品や衣服をベニヤ板に穴を開け紐を通した簡単な台車のような物に物品を入れて行く。

袋に入ったまま未開封のチョコレートなどが沢山積まれていった。お菓子類は基本的に少年、少女に配布される。

「さて、次はこいつだな」

この黒く大きな丸い物体を見上げる、大きさは優に約四、五メートルはあるだろう。

ラクダは左手でその黒く大きな丸い物体に触れながら何週かその周りをまわったあとに腕を組み口を開いた。

「ナニでできてるんだろうなこれ、というか、何に使うもんなんだ？見たところ放熱部も大砲も無いし、兵器じゃねえのかな。」

所々でこぼこはしてるけども移動をするキャタピラや車輪も無いし。こいつ単体で使うものでは無いのかな」

爆弾か何か、とは話題に挙がったものの使われる火薬は衣服に

仕込んで置いて敵陣に物資として送るものが主体で

発火温度はほとんど常温に近いものばかり、こうして日の光に当たっているだけで爆発はしておかしくない。

つまりは爆弾ではないものである、という見解だ。触った感触からして、鉄製のモノであるらしいが。

「ん、まああれだ。見たところ鉄っぽいし溶解して再利用でもするか、これだけありや家の二軒や三軒建てれるだろうしな」

ラクダが持ち帰るという意思を見せると同時に作業服のメンバーはワイヤーを黒い物体に付けた。

そのまま引つ張り持ち帰るようだ。

ワイヤーは左右に六本ずつ伸びていて、一本毎に二人配置し合計で二十四人の男達が位置に付いた。

クロもその中に入っている。

ラクダは丁度中心に位置する場所のワイヤーを手に取り声を張り上げる。

「ようし、行くぞ！　せーの！」

掛け声に合わせて一歩ずつ確実に進んでいく、足を絡めとる砂は日光を浴びていた為に熱を帯び、体に深く刺さる。

体内から一滴一滴歩数に合わせて汗が逃げ出して行く。

運び出して数分ほど経った時、異変は起きた。

「……？　なあ、さっきから何か音がしないか？」

左側に張られたワイヤーを引つ張っている男達が周りを見渡しなから呟く。

「さあなあ。おかた少し先に行ったとこでドンパチでもやって…」

「お、おい！　あれ見ろ！」

何やら焦った様子で運んでいる黒い物体の後方に指を向ける。そこには砂埃を巻き上げながらこちらに向かってくる“何か”がいた。

「あれは……北軍の蟹船じゃねえか！」

「冗談じゃねえぞ！　俺はまだ死にたくねえ！」

蟹船と呼ばれているソレは外見上は小さな船であるが、圧倒的に

おかしい部分がある。それは船底から伸びている先端にスコップが付いた銀色の管、いや、脚と言ったところだろうか。

船底から八本程伸びている脚をそれぞれ交互に動かし砂丘を強引に切り崩し進んでいる。

その異様な進み方の船を視認し、二人三人とワイヤーから手を離し逃げ出して行く。

「うーん、厄介なのに会ったな……。北の勢力様達とはことん赤群街の住人が嫌いみたいだな、この前もかなり追い掛け回されたばかりだぞ。」

甲板には四人ぐらい出でてレンズ越しにこつち見てるし、ありや完全にここ来るつもりかね」

慌てふためいている他のメンバーをよそにラクダは実に冷静だった。右手を額に付け遠くを見る素振りをしながら戦況を分析。

「今回の運が悪かった事は、あいつらに会ったこと。今回の運が良かった事は、ここにクロが居たことだな」

不敵な笑みを浮かべながら熱い眼差しをクロに送る。まるでその顔は今から悪戯でもしてやろうかと企む意地の悪い子供のようだ。

「敵は、何人でしょうか」

クロは静かに足を肩幅まで広げ、両腕を曲げた状態でしっかりと脇を閉める形で臨戦態勢を取った。

「そうだな、あの船の大きさじゃ中に船内に更にいたとしても六人が関の山ってとこだな」

ラクダはクロに頼むぞ、とコンタクトを送った後に腰を落とし膝を勢い良く叩き気合を入れた。

「よし！ お前ら！ 戦う気のある奴はクロのサポートに回れ！ 男見せてやれ！」

地を揺るがす程の声が上がり場が締まる。逃げ出した者を差し引いて現場には総勢十六人の男が残った。

近づくほどに地鳴りが大きくなり距離にして約七メートルの位置で船はぴたりと止まり甲板に立っていた四人の内三人が飛び降りる。

それを見たラクダ一行はクロを中心とし左右に七人ずつ別れ、その後方でラクダが指示を送るような陣形になった。

敵は筋骨隆々の体、その手には金属製の斧が握られ、呼吸は荒々しく、恐ろしいまでの殺気が感じられる。

ただ一人甲板に残り厚手のマントを羽織った男達が静かに口を開いた。

「…姦しい。人間様の道具を漁り、横取りするゴミ共め。視界に入れるだけで不快だ。何故上の奴等はいいつらが生存している事を許可している。何故だ」

「あらら、南の勢力と喧嘩して負けた腹いせか？ みつとも無いな、男らしくないねえ」

挑発的にラクダは話しかける、声からは勝利を確信しているような自信が汲み取れた。

「……クズが。死体は野鳥に処理させる、思う存分に殺していいぞ」マントの男が右腕を上げ、それと同時に砂丘に足を付けていた男達が飛びかかる。

「来るぞ！ 相手は戦闘のプロだ！ お前ら氣い抜くなよ！」

「ガハハ、お前らのような戦闘に関して素人以前のゴミが氣を抜かなくても結果は同じ事！ くたばれ！」

敵は二方向に分散し、左右に分かれたグループがまずは二人を応戦。

立ち回りは明らかに舐めきっている様子であった。

（よし、思った通りだ。奴等は俺たちが素人だからと油断してやがる、これならクロ以外でも行けそうだな）

中心部に残ったクロと敵はじりじりとお互いの距離を保ちつつ近づき、対峙していた。

「ゲゲゲ、ゴミ風情がカンフー服など着て拳法の真似事が、みつともない、みつともない」

「喚いてないでさっさと来たらどうだ。俺が怖いかな？ 能無し」

今迄の優しい風貌とは裏腹に凍りついた声色で手を前に出し挑発

する素振りを見せる。

「ほざけ！ 貴様の喉元搔き切ってそのような戯言、一切吐けなくしてやるう！」

斧を振りかぶりながら勢い良く突進。

だが彼はこれに臆する事無く深く脚を曲げ前面に放物線を描くように跳んだ。

空中で体をひねりながら両手で丁度こめかみに親指が来る形で敵の頭部を掴む。

「……え？」

驚愕するのも無理は無い。目の前に居たカンフー服の敵を確実に捉えていたはず、だが数秒のうちに視界から見失い上空に居る。

「遅えよ」

そのまま遠心力に身を任せ肩甲骨の間を思い切り膝で蹴る。

鈍い音がすると共に苦痛によって表情が歪み、低い唸り声が漏れた。

敵に打撃が当たったのを確認すると掴んだ手を下方向へと思い切り落とし、首から何かが折れる音が聞こえる。

すると体は浮き上がり、無防備になった胴体へ向け

「シッ！」

体全体を回転させながらみぞおちへと力カト落とし。

敵は痙攣を起こし、気絶していた。

流麗かつ迅速に敵の機動力を削ぎ、戦闘を離脱させたこの動作は僅か十数秒の間に行われたものだっただ。

「まずは一匹仕留めたか、ラクダさん！ これを！」

無残に横たわる筋骨隆々の男の隣に置いてあった鉄製の斧をラクダに向かって投げ渡す。

「おおよ！ 任しとけ！」

満面の笑みで斧を受け取り向かって右側に走り出した。

「お前らア！ よっく掴んどけよオ！」

「こ、こいつら！ ……よ、よせ！」

合図と同時に応戦していた者達が飛びかかり体の自由を奪った。右足に二人、左足に三人、斧を持つ右手に一人、気絶し寝ている者が一人。

「よ、よせ！ そんなモノで殴ったらどうな……」

「痛えだろうな！ ゆっくり味わいな！」

持っていた斧を逆手に持ち替え、全身全霊を込めて顎を打ち抜いた。

酷く低い衝撃音があたりに響き渡る。

「あぎい！」

断末魔と共に体がよじれそのまま数メートル吹き飛んだ。

「よっし！ これであとは二人だけだな！」

左側の七人に目を移すと既に敵はクロによって片付けられていた。「フー。意外とぬるい相手でしたね」

全員が鋭い目付きで甲板に立つマントの男を見上げる。

「…フン。こんな奴等に遅れを取る部下だったとはな、失望したぞ。いくらこの私だと言え、多勢に無勢。今回は退いてやろう」

「あん？ 負け惜しみ言う前に降りてこいつらのようにくたばったらどうだ？」

「クズが……」

間髪入れずにまたもやラクダは挑発的に誘う。

だが敵は乗らず、強く歯ぎしりをし、船内に戻りそのまま去っていった。

「よっしやー！ 帰ったらたふく呑むぞお前ら！」

男達は勝利の雄叫びを上げ、撃退に成功した喜びに打ち震える。

「さて、勝ったのはいいがこのままだと“これ”運びだせねえな…ケガ人も連れて行かないとならんし…」

黒い物体を触り物寂しげに漏れるように呟く。持ち帰りたい気持ちが大いだろう。

だが戦闘によって傷を負った者、敵を前に逃走をした者、人数は計十二人にまで上った。

状況を見れば負傷者の治療が先決。何より本来の目的だった食料品などはすでに確保できている。

「ふむ…、もう少し軽かったら私が持っていくのですが…」

『何よ、それじゃまるで私が重いみたいじゃない』

声。

女の子の声。

周りには何度見ても男しかない。

「…？気のせいだろうか、今何か声が」

「ああ、俺も聞こえたぜクロ。なんか甲高くて腹が立つ声だったな」

『何よ何よ！私の事重いだとか腹が立つだとか！』

「……………」

その甲高い声のする方向は明らかに黒い物体の内部。

「こんなものに発声装置付けるとはいい趣味した奴もいるもんだな」

『あ、無視した挙句また悪口？ あーもう、アツタマ来ちゃった』

前方から広がるように軋む音を奏でながら放射状に着々とヒビが入っていく。

その光景を目の当たりにした一同はすぐさま後方へと飛び、距離を開けた。

「んんん？　なんだなんだ、割れるのかこれ？　おおい、一体どうなんだ」

隣に立つクロの表情が一段と研がれた刃のように鋭くなっていく反面、はつきりと一筋の汗が流れて行くのをラクダは見ていた。

どうやら、本当にただ事では無いようだ。

ヒビが入り割れて行くその様はまるで孵化をする生物のようにゆっくりと行われた。

固唾を飲んで見ている中、それは静かに開いた。

（なんだ…？　この“気”は…？　ここまでこの場に留まっていたくないと思わせる気配は師匠以上に強烈…！）

「はーすつきり。さあて、どうアンタら料理してやろうかしら」

「皆さん…何かただならぬ“気”を感じます。十分に気をつけてく

ださい」

現れたのはクロより背丈は頭二つ分程小さく同年代であろうかと思わせる少女。

華奢な体の動きに合わせ揺らめき、動く見事な銀色の長い髪の毛は絵画と思わせるほど完成されていて、美しいものだった。

思わず息を飲むほどに美しい銀の髪に負けず劣らず自らの存在を主張する顔。

すらりと伸びた上品な作りの鼻、妖艶なまで壮絶に赤い唇、白く透き通るような肌。

それら全てが引き立て役にしか成り得ないであろう優しく、その中には別の空間が広がっているのではないかと思わせる黒く大きい瞳がこちらをじっと見つめている。

「た、確かにただもんじゃねえなこのねーちゃん。この人数を前に素っ裸でも物怖じ一つしてねえ」

ボンッ

「わ、わわ、私は何も見てないぞ！？ 見てないんだからな！？ 第一このような状況でそんなものを予想できるはずもない！

臃げ、そう、臃げだったんだ！ 張り詰めた空気の中あまつさえこんな事象、あぁなんてことだ！」

クロ、大混乱。狼狽。慟哭。

湯でも沸かせるんでは無いかと思うほどに顔を赤くし、異常なまでに早口になる。

目にも留まらぬ早業で上着を脱ぎ少女へ投げつけた。

「ぎゃん。…何よこれ、汗臭い」

「いい、いいからそれを着ろ！ 早く！ なるべく早く！」

呆氣にとられる皆をよそに、渋々と受け取った汗臭い赤いカンフー服を着る。

男物という事もあり二回り程度大きいサイズ、しかし体軀を隠す意味ではぴったりだった。

「へえー、今時こんな“うぶ”な奴もいるのね。なんだか調子狂っ

ちゃった」

乗っていた物体から軽く地を蹴り砂丘へと飛び降りる。

「ねえ、アンタたち。」

私が壊したこれは球体状の睡眠装置なの。意味わかる？

これから寝るところを探さないといけないの。案内して頂戴」

クロと少女のやり取りを見ていたラクダは閃いたように応答する。

「ああ、いいぜ。さっきの事は謝っておこう、見たところお嬢ちゃん俺達の敵では無いようだし。

寝るところが欲しいんならこの黒髪の兄ちゃんのことついていきな」

「！？」

指さした先にはとても仰天した表情のクロが。

カンフー服を脱ぎ、白いTEEシャツとなり気の抜けたその姿は一言で間抜けそのものだ。

「ちょ、ちよつとラクダさん…どうい」

「ほら、あそこに見える街があるだろ？ 赤群街ってんだが、どうにもお前さんみたいな年頃の嬢ちゃんが少なくてな。

せっかくなんで近い歳同士、居させてやりたいのよ。で、この黒髪の兄ちゃん…クロの家に泊まってやってくれ。

さっきの反応見たろ？ 悪いことはしやしねえさ、安心していい。する度胸も無いだらうからな、ガハハ」

反論する隙も無く機関銃の如くにバシバシと言葉を弾丸にし飛ばしてくる。

満場一致でクロと同行、という雰囲気負け彼は折れ言う通りにする事に。

「ふうーん。あまり気が乗らないけどまあいいわ。案内して、クロ」
「どうしてこんな事に…」

「よっし、そうと決まればさっそく帰るぞお前ら、こいつも割れて運びやすくなったしさっさと持つてくぞ！」

落ち込む白シャツの少年とは裏腹に意気揚々としている作業服の

オジサン達。

残った男達総出で先程小さく分裂した大きな黒い物体だった鉄くずに群がる。

「何？　それが欲しいの？」

不思議そうに膝を抱え少女は尋ねる。

「ああ、家を作るのに使えそうだからな。どうせ壊しちまって使えないんだろ？　使わせてくれ」

「そういう事じゃなくて。必要なら私が運んであげるわよ」

意味を確かめる前に言葉で聞かずとも、視覚で理解した。

少女が左手を空中にかざすと同時に鉄くずだけがみるみると吸い込まれて行ったのだ。

「はい、スツキリ。行きましょう。着いたら出してあげるから心配しないで」

呆然とする作業服の集団を横目に悠然と赤群街へ歩いていく。

気がつけば空は既に夕焼けの独特の赤みを帯びた色を成しておらず、鮮明に星々が輝いていた。

「もー、アンタらおっそい、何やってんの？」

月明かりに照らされ、赤群街の入り口で瓦礫の上に座り頬を膨らまし不機嫌な表情のお嬢様が一人。

「だってな、嬢ちゃん、な、おっそろしく、はや、はやいんだもん、はー。そりゃ、俺ら、遅くなるわな」

顔から滝のように汗が流れ疲労からこの数分で歳が取ったように見えるラクダは、肩を上げて必死に呼吸をするために辿々しい喋り方になっている。

何があったのかと言うと、大の大人が走って数分の距離をたったの数秒で歩き、そりゃもう涼しい顔で汗のひとつもかいてないのだから驚きである。

体術を得意とするクロでさえ、その速度についていくのは困難であつた。

「ま、いいわ。ほら出すわよ」

今度は右手を空中にかざし、先程左手で取り込んだ黒い鉄くずの束を雨のように降らす。

とても当たり前、日常的風景のように行われるその所作に誰も疑問を投げかける事などできなかった。

「おお、悪いなお嬢ちゃん。後はもう手が足りてるからクロと一緒に戻ってくれ。」

「だ、そうよ。早く行きましょう。私疲れてて若干眠いの」

長く艶やかな銀髪を風に泳がせながら未だ落胆している黒髪の少年へ視線を向ける。

「わかったよ……」

行きと同じ道を辿る。

その道は夜という事もあり、何かさみしげに思わせるものだった。光熱を利用した発電システムを用いており、外部から引かなくても電気が利用できる。

貯蔵された電気には限りがあるので灯りを点けているような家は一軒もありはしない。

「寂しい街ね。私が見てきたどの街よりも寂しい場所」

彼女は、街を見るためか先程のような馬鹿げた速度ではなくクロに歩幅を合わせていた。

ぽつりと草の葉に溜まった雫が落ちるように、言葉が漏れる。

「……夜は手元が見れるほどの灯りで十分なんだ。ロウソクを使つて皆読書や料理をしている。

よく見ると揺らめいてる場所が所々あつてキレイだよ」

「あ、ほんと……」

遠くに視線を置くと、そこには蛍のように弱々しくも美しい光の姿があつた。

昼間のようなベニヤの集合体のような光景とは、全く別の街になっている。

そんな光景を数分間、ゆっくりと味わったのちに十五メートルはあるであろう高さの家々の前で歩みを止めた。

「この一番上のところなんだが、登れるか？」

見上げると頂点のところに白いカーテンが付けられた開放された
ままの窓が。

「ふふ。舐めないで」

いたずらに笑顔を見せ、腕を後方に降るとともに深く屈伸。

そのまま一度の跳躍で部屋へと入っていった。

「…。どうなっているんだあいつは…」

目の前で起こる不可解な出来事を整理もできずに、おとなしく部
屋へと戻った。

「やだ…狭いし汚いし…。何これ？」

“月刊KIRAMEKI”…！？ これ出版社の脱税がバレて廃
刊になった奴だわ、懐かしい。

こっちはどれどれ：“世界最凶超特集”…どれも十年前以上に流
行ったものじゃない、あははは、おつかしい」

「…、おい、泊まってはいいと言ったが勝手に人の家を物色すると
はいい度胸だな」

部屋を中心に垂れ下がるランプに火をくべると、そこには眉間に
しわを寄せながら口元をひくつかせた笑みで、目の前に広がる本の
山を倒し床にうつ伏せに寝転がる少女を見る少年の姿が。

よく見ると服が捲り上がり、お尻が露出している。これは危険だ。

「お、おい！ 早くその…その尻を隠せ！ なんだってこんな…」
左手で目を覆い外を見る。

「アンタってやっぱり女の子が苦手なんだあ、へえ、ばったばった
敵さん倒したあの姿とは大違いね」

じりじりと歩み寄る気配を感じ、視線を前に移すとそこには。
ぷちっ、ぷちっ

「な…なにを…して…？」

「ん？ ボタンひとつずつ外してこれ脱ぐの。見ればわかるでしょ
？」

「な…」

「私ね、さつきも見たでしょ？ 裸じゃないと寝れないの。服があると肌で呼吸できないじゃない」

「うおおあ！ わかった！ わかったから俺が寝るまで少し待ってくれ！ 頼む！」

「全く、誰が“俺”なんて汚い言葉を使えと言ったネ」

窓と反対側の方向に位置する暖簾の隣には、老師が柱にもたれかかりながら少年少女を見ていた。

黒髪の少年が少女の着るカンフー服のボタンを手につけ、押し問答しているその絵面はとても危険である。

「あ、ねえ、あっちの部屋は空いてないの？」

少女はそう言い、暖簾へと指を伸ばす。

「女人禁制だ！ 空いてるのはここしか無い！」

「何よそれえゝ、ケチ臭い」

諦めたのか脱ぐ動作をやめ、寝転がり床に散らばる雑誌を読み始めた。

「うむ。大丈夫そうネ。話はラクダちゃんにさつき聞いたからゆつくりするといいヨ」

背中をこちらに向け、手をひらひらとさせながら暖簾の奥へと消えていった。

「そういえば、アンタら全然私の事聞かないわね。名前すら知らないヤツをすんなり泊めたりなんかしていいの？」

上体を起こし窓枠に座るク口を見つめる。

少し考える素振りをしたのちに口を開いた。

「…なんでと問われているのならば困るものだな。基本的にここに住む者はみな何かしら凄惨な過去を持っている。

ラクダさんもその一人だそうだが、私はいまだかつて一度も聞いたことがない。

消したい、忘れたいであろういきさつを無理に話させる必要も無いだろう。ここはそれが暗黙の了解となっているんだ。

それに、もし名前を尋ねたりする時はまず自分から、だろう」

「あ。何よそれ。私の事興味ないっていうのね」

手に持つ雑誌を飛んでいる虫を殺すような勢いで閉じ、軽い破裂音が部屋中に鳴り響いた。

少女は、四肢を交互に前に出し、ずいずいと窓枠に向かっていく。

「あ……いや、そういうワケじゃ……」

精神を摩耗させる化物が窓枠の反対側に座ったときには既に遅い。いくら『しまった。』などと思っても過去なのだ。

「私、私の名はノミニス。古い言葉で光って意味なのよ」

手を自分の胸にあてながらそう言い、首をかしげながらこちらに手を向ける。

「あ……お……私は、クロ。……よ、よろしく」

右へ左へ上へ下へ休む事なく目を動かしながら頭をわしわしと抱え、呟いた。

「ふふ。怖がりすぎよ、取って食べるわけじゃないんだからリラックスして、部屋主さん」

口元に手を当てながら微笑むその姿は、とても無防備で、とても無邪気で、とても美しかった。

心の中で困っていた何かが崩れて行くのをハッキリと自覚した。

「クロ？ あなたみたいなのはいままで生きてきた中で一度も会ったことが無いの。すっごく純粋なのね。」

なんだか私、あなたの事もっと知りたくなってきちゃった。あ、過去を聞くのはダメなんだっけ？」

「いいよ。私の事なんかでよかったら話すよ、私もノミニスさんの事が知りたい、し」

クロはこれ以上ないであろうほど、積極的に早く答えた。まるで目の前のその興味がよそへ向かないようにとするために。

じゃあ決まり。と両の手のひらを顔の前で軽く合わせ、またも優しい笑顔を見せる少女。

「まず、私は……」

どこか虚ろな目で遠くを見つめながら、彼は口を開いた。

「この街の外を知らない。生まれる前から延々と北部と南部で戦争を行っているから、出た試しがない。」

私だって命は惜しい。だが、外の世界を見たいという気持ちが収まらぬまま、苛立が募ったときはこの部屋に散らばる本と同じようなものをよく読むんだ」

「じゃあ、生まれた時からここにいてこと？ ご両親は？」

「両親は……いない。私は生まれて数年の間はこの部屋以外に覚えていたものが無いんだ。」

幼き頃からずっと、そうずっと、さっきここに来た老人がいただろう？ あの方はテン師匠。

武道に精通し、昔はこの大陸で最も強いと言われていたそうだ。事実かどうかはともかく。

私を十数年ここに置いてくれ、尚且つ拳法を学ばせて頂いた恩師でもあるんだ。

こんなところだろうか、生い立ちなど詳しく説明しても修行していた日常しか思い浮かばいので割愛させてもらう」

おもむろに窓枠から降り、部屋内に散らばる本を片手に淡々と喋った。

壊れかけた椅子の隣に座り手をノミニスへと向ける。

「じゃあ次は私ね」

よいしょ、と小さな声と共に同じく窓枠から降り、クロの脇で彼の肩程度まで積み上げられた本に手を置いた上に顎を乗せ膝を立てたような姿勢で座り、黒い瞳で彼を見つめながら空気を吸う。

「私も、両親の事知らないの」

一番上にあつた本をめくりながら視線をそれに落とす。

「詳しく言う両親なんていないのかもしれない。私が生まれた時は何かの液体に漬けられて、体には色んな管が繋がれて、白い服に身を包んだ人達が見ていたわ。」

誕生してからは数年間、世界の事を勉強させられたの。知識をそのまま詰めたつていうのかな。

外出する時は昼間に見た黒くて大きいのがあつたでしょ？ あれに乗せられて目的地へ発射されるの。

飛ばされた時は少しわくわくしたりする。だけど、旅行気分で各地を回ってもやってる事はみんな同じ。戦争。

言ってもわからないかもしれないけど、作ってくれた人が言うには私は“究極生命体”で“全人類の光”なんだって。

この世に不必要な人間を消して、必要な人間を救うための生命体。今回ここに来たのも、私を作った人達に北部の人間が南部のトップを殺してって多額のお金で頼まれたからなの。

おかしいよね、必要な人間ってなんなんだろうね。他人を殺しても自分が生きたいと思う人間なのかなあ」

笑顔で語るその表情の中に少し淋しげな印象を受ける。

驚愕すべきその内容を聞かされても、クロはいたって冷静だった。

「難しい話だな…、今まで考えた事も無かった」

それから二人は時計の針が天井を指すまで語り合った。

好きなことや、今まで会った者の事。

世界の戦争の数。

気がつくと、クロは自分がいつ眠ったかすらわからずに、朝日に照らされ目を覚ました。

日差しが部屋中に遍き、ふと気がつく。

いくら目をこすつても視界の中に彼女の姿を捉える事ができない。あるのは、軋み、今にも崩れそうな椅子にかけられた赤いカンフ

服のみ。

「ノミ…ニス…？」

胸の奥底から焦燥感が溢れた。

心の片隅にぽっかりと開いた空間を埋め尽くすように。

書物に囲まれた部屋で、一人佇んだ。

それから間もない事だった。

北軍の勝利で戦争が終結したのは。

聞くところによると、南部の首脳がある者に殺害され、烏合の衆と化したところを攻め入り皆殺しにしたそうだ。

その犠牲者数は、優に三十万を超える。

「クロ。本当にそれで、いいんだネ？」

酒瓶を持った老人が赤群街の入り口で肩から荷物を掛けた少年に問う。

「はい、自ら進んで決めた道。押し通してみせます。あの日会った少女に、これ以上手を汚しては欲しくないのです」

少年は、深々とお辞儀をし、砂丘を進んで行く。

行方を知らぬ少女に会う為に。

全世界へと向けた非暴力の思想を抱えて。

（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。
ご意見、ご感想、誤字脱字、読んだ時間を返せなど、どしどし
ぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0033m/>

袋とじ戦争

2010年10月8日14時40分発行